教科書文庫
4
815
41-1926
2000064974

改訂

帝國新文典

下卷

文學博士
芳賀矢一 著

41879
教科書文庫
4
815
41-1926
20000
64974

資料室

大正十五年二月二十日
文部省檢定濟
中學校國語科用

教科書文庫
4
815
41-1926
2000064974

訂改

帝國新文典

下卷

文學博士
芳賀矢一著

広島大学
教
64974
図書

広島大学図書
2000064974

東京 冨山房 神田

375.9
H47

教師諸君へ

帝國新文典が諸學校に採用されてから、はや三學年を經ました。皇國文典に比べて、大變に教へ易くなつたといふ贊辭をいたゞいたのは、著者の最も喜とする所で御座います。尚種々の御意見を參酌して、ここに改訂版を公にすることにいたしました。

大正十四年八月　　著者しるす。

帝國新文典は各地の教師諸君からの御注意を參照したことが多いので、前の皇國文典に比して一層の簡易平明を期するといふことが、大主眼であります。

一、本文の全部を口語文に改めたこと。

二、口語文との接觸を忘れずに、所々に說明を加へたこと。
三、正誤篇を廢して、これを所々適當な所に配置し、その知識を確實ならしめるに力めたこと。
四、文主の章を廢したこと。
五、練習には成るべく多くの改正を加へ、又口語文をも加へたこと。

等が主要な改修點になつて居ります。それから從來の煩瑣な〔注意〕等も成るべく廢止しましたし、特殊な事柄をもわざと略した所があります。これ等は敎師諸君が便宜補つてお授け下さい。

大正十一年八月

著者しるす。

改訂

帝國新文典　下卷

目次

第三篇　文篇

第二十二章　文……一
第二十三章　主語、述語……三
練習二十六……七
第二十四章　叙述の種類その一……八
練習二十七……二
第二十五章　叙述の種類その二……二
第二十六章　叙述の種類その三……二
練習二十八……一五

第二十七章　文の要素の節略……一六
練習二十九……一九
第二十八章　修飾語……二〇
練習三十……二八
第二十九章　單文……二九
練習三十一……三四
第三十章　句—複文……三五
練習三十二……四一
練習三十三……四二
第三十一章　節—重文……四三
練習三十四……四六
第三十二章　文の構造に就いての注意……四八
練習三十五……五一
練習三十六……五二

練習三十七……五二
練習三十八……五七
練習三十九……五九
練習四十……六一

目次終

改訂 帝國新文典 下卷

文學博士 芳賀矢一 著

第三篇 文篇

文法上の文を説明してその構造を明らかにし、我が國語の性質を知らしめるのである。

第二十二章 文

(二五) 犬、花、富士山、學問、學ぶ、習ふ、美し、明らかなり、詳なり。

右はいづれも單語で、單語は唯一つの概念を示すものであ

る。

【注意】助動詞、助詞は他の詞に附屬して用ひるもので、概念を示すものとはいひ難い。けれども單獨の品詞として、尙これを單語と見做す。

〔二二六〕猫の目。　右向け。　散りたり。

花よりも。　麻の如く。

道を知らず。　求むべからず。

右は單語の集つたもので連語である。連語は單語の集つて成立つたものではあるが、まだ纏つた思想をいひあらはすものではない。

〔二二七〕犬走る。

花散りたり。

紅葉は花よりも紅なり。

天下麻の如く亂れたり。

神國にふさはしき山は富士の外に求むべからず。

右のやうにいふ時は、どれも皆纏つた一つの思想をいひあらはすことになる。

單語が集つて纏つた思想をいひあらはすものを文といふ。

第二十三章　主語　述語

〔二二八〕纏つた思想卽ち文には必ずその題目となるものがあり、その題目について、何事かを叙述するのである。犬、花の題目に對して、走る、散りたり　の如き叙述があつて、こゝに始めて「犬走る。」「花散りたり。」といふ文が出來る。そこで文の題目となる語を主語、文の叙述をなす語を述語

といつて、文には少くとも一つの主語と一つの述語とがなければならぬ。こゝでは犬、花が主語で、走る、散りたり が述語である。

主語は多くの場合に於ては體言である。

述語は多くの場合に於ては用言(又は活用連語)である。

〔一二九〕言ふは易く、行ふは難し。

教ふるは學ぶの半ばなり。

用言を主語として用ひたのである。各用言の下に こと の略された形である。

〔一三〇〕見るもの稀なり。

信ずること篤し。

もの、こと などの體言と結びついた連語で、文の主語となることも少くない。かういふ場合には文法上、もの、こと 等を主語と見るが、意義からいへば、連語全體で主語の用をなすものである。

〔一三一〕正成は忠臣なり。

東京は世界の大都なり。

嚴霜雪の如し。

右のやうに助動詞が述語となることも少くない。

これは何の繪ぞ。

汝は正成の子か。

右の例のやうに、助詞で述語となることもある。

【注意】正成、東京、嚴霜、これ、汝、等の主語に對する述語は、その下に來る 忠臣、大都、雪、繪、子 等であるといはなければな

らぬ。けれども文の構造上の説明としては、なり、如し の助動詞、ぞ、か の助詞を述語と見做すのが便利である。

(一三三) 主語と述語との關係、卽ち叙述には三つの種類がある。

口語でいへば、

(一) 何がどうする。

(二) 何がどんなだ。

(三) 何が何だ。

(一三三)「何がどうする」といふ關係を示す場合には、動詞がその述語となる。「犬走る」、「花散りたり」のやうな類である。

(一三四)「何がどんなだ」といふ關係を示す場合には、形容詞か、助動詞の 如し が、その述語となる。

例、水清し、

月明らかなり。

月色銀の如し。

(一三五)「何が何だ」といふ場合には、助動詞の なり、たり、又は助詞がその述語となる。

例、日本は神國なり。

東京は日本の都たり、

これは何の花ぞ。

鯨は魚か。

練習二十六、 次の文の中から主語を見出せ。

1 日月流水の如し。

2 天墨の如し。

3 富家の子は世間の苦を知らず。

4　海棠といふもの、こまやかに麗しき花なり。
5　農業の發達も一大頓挫をなせり。
6　噴火口の形は漏斗のやうな形狀をしてゐる。(口)
7　言はぬは言ふにまさる。
8　日暮舳に笛吹く人あり。
9　やう〳〵鎌倉の夏が來た。(口)
10　花崗石とは御影石のことか。

第二十四章　叙述の種類　その一

（動詞の述語となる場合）

〔一三六〕月出づ。
馬躍る。
これは述語の動詞だけで叙述の完全な文である。

〔一三七〕勉強超ゆ。

氷なる。
これは述語の動詞だけでは、「勉強が何に超ゆるか」、「氷が何となるか」明瞭でない。
勉強衆に超ゆ。
氷水となる、
の如く、「何に」、「何と」の問に對する語を加へて、叙述が始めて完全になる。

〔一三八〕老母先だたる。
實朝殺さる。
敵退却せしめらる。
これ等の文にも「何にどうせられたか」といふ實際の動作者が無ければならぬ。

老母子に先だたる。

實朝公曉に殺さる。

敵我が軍に退却せしめらる。

として、叙述が始めて完全になる。

〔一三九〕義經平氏を討つ。

猿柿を落す。

我が軍敵をして退却せしむ。

これ等の文は「何をどうするか」といふ關係を示すもので、述語の「どうかするもの」の外に、なほ「どうかせられるもの」を加へて、叙述の意味が始めて十分になるのである。

〔一四〇〕教師生徒に文法を授く。

賴朝義經をして平氏を討たしむ。

義經賴朝より平氏を討たしめらる。

米人華盛頓を大統領と定む。

右等の文は述語の外、なほ二つのものを補つて、叙述が始めて完全になるのである。

述語の意義を補つて叙述を完全ならしめる語を補語といふ。

【注意】補語は を、に、より 等の助詞を伴なつて居ることが多い。

〔一四一〕天くらくなる。

風俗野鄙になる。

右のやうに形容詞や形容動詞のありに連らぬ本の形なども、叙述の補語として用ひられる。

【注意】辱くす、重くす、一にす、以てす などもこの類であるが、これ等はすでに一つの動詞となつたものと見做してよからう。

練習二十七　次の文の中から動詞の叙述を助ける補語を見出せ。

1　艱難汝を玉にす。
2　束帶の身にも黒金の衣を着けたり。
3　文武の功臣に爵位を授く。
4　朱に交れば赤くなる。
5　刻苦して蘭學を修め、蘭學者の泰斗となつた。(日)
6　一旦の榮華に恥りて、百年の計を思はず。
7　利根川は一名を坂東太郎といふ。
8　汝の姓名は何と申すぞ。

第二十五章　叙述の種類　その二

(形容詞又は助動詞如しが述語となる場合)

〔一四三〕花美し。
月明らかなり。
述語だけで叙述が完全な文である。

〔一四三〕六は三より多し。
苛政は虎よりも猛なり。
一つの補語が加つて叙述が完全になる。

〔一四四〕月色銀の如し。
容貌愚なるが如し。
助動詞　如し　が述語となる時は、補語が必ずなければならぬ。

第二十六章　叙述の種類　その三

(たり、なり及び助詞が述語となる場合)

前の二章で「何がどうする」、「何がどんなだ」といふ關係の文を學んだ。助動詞や助詞の述語となる場合は、「何が何だ」といふ關係を示すのである。

〔一四五〕正成は忠臣なり。

東京は大都會たり

右の例で助動詞なり、たりが述語で、主語は正成、東京である。この關係は「正成は何だ」、「東京は何だ」といふので、その答として忠臣、大都會のやうな體言を出さなければならぬ。この場合なり、たりは文法上の述語であるが、叙述の要部は補語の體言に在りといつてよろしい。〔一三〕注意參照〕

〔一四六〕これは何ぞ。

鯨は魚か。

右の文で助詞のぞ、かが述語を務めて居る。これも前のと同じく、「何が何だ」といふ關係を示す文であるから、助詞の上には必ず體言の補語を要するのである。

〔一四七〕かゝる場合の補語には、こと、もの、ため、所、ゆゑなどの體言に終る連語を用ひることも多い。

練習二十八、次の文から形容詞、助動詞、助詞の叙述を助ける補語を見出せ。

1　筆は劍よりも鋭し。
2　砲聲殷々として遠雷の如し。
3　花より外に知る人もなし。
4　蕎麥の花雪よりも白し。

5　周防守重宗は勝重が嫡男なり。
6　過ぎたるはなほ及ばざるが如し。
7　書籍は青年の滋味なり。
8　蝙蝠は鳥なりや、はた獸なりや。

第二十七章　文の要素の節略

〔二四八〕文の主語、述語、補語は文を組立てるに大切な部分であるから、文の要素ともいへる。けれども都合によつては、要素の一二を省略することも少くない。

〔二四九〕人の短をいふこと勿れ。
枝を折るべからず。
一寸の光陰輕んずべからず、
右の文は命令の文で、命令をあらはすのには主語を省くことが普通である。又

〔二五〇〕賴朝を征夷大將軍に任ず。
詔して憲法を頒ち、又皇室典範を定む。
伏して惟るに。
明日出發し、明後日到着すべし。
などは皆主語を省いたのである。國文では主語を省くことが頗る多い。

〔二五一〕月色銀の如し。この良夜を如何に(せん)。
伏して冀はくは御購求あらんことを(乞ふ)。
諺に曰く、塵も積れば山と成ると(いへり)。
生還するもの三人のみ(なり)。
勉强は幸福の母(なり)。

この年即位す。年甫めて十三(なりき)。

右のやうに述語を省いた文も少くない。

〔一五一〕實朝の(公曉に)弑せられしは承久元年なり。

終日友を待てども遂に來らず。

疑義あるものは(その疑義を)(余に)質問すべし。

これらは補語を省いた文である。

〔一五二〕諺や、俳句や、川柳や、和歌などでは、修辭の都合上、助詞、助動詞は勿論、文の要素を省くことが可なり普通である。その方がかへつていひあらはし方を巧妙にし、意味を深長ならしめるのである。

(人は)花より團子(を愛す)。

應々といへど(人の)叩くや雪の門(を)。

敷島の大和心を人とはば朝日に匂ふ山櫻花(と答へん)。

練習二十九　次の文に適當な要素を補へ。

1　功五級に叙し、金鵄勳章及び年金三百圓を賜ふ。

2　一寸の蟲にも五分の魂。

3　尙はくは饗けよ。

4　福は內、鬼は外。

5　一刻を千金づゝにしめあげて六萬兩の春の曙。

6　本規則は來る九月より實行す。

7　目に靑葉山ほとゝぎす初がつを。

8　本居宣長、本姓は小津氏、幼名富之助、後に孫四郎又健藏と改む、伊勢國松坂の人、世々醫を業とす。二十七歲にして始めて國學に志し、賀茂眞淵の門に入り、古典を研究す。

第二十八章　修飾語

〔一五三〕文には文の要素の外、文の要素を形容し、或はその意味を限定するに用ひる語がある。この役目を務めるものを文の修飾語といふ。

〔一五四〕修飾語には(一)文の中の體言を修飾するものと、(二)文の中の用言や副詞を修飾するものとがある。

その一　形容詞的修飾語

〔一五五〕若き齢は重ねて來らず。

富士山は皚々たる白雪を戴く。

形容詞の若き、皚々たるは體言の齢、白雪を形容して居る。それ故に修飾語である。

〔一五六〕眠れる兒は神の如し。

吹く風寒からず。

動詞の眠れる吹くは形容詞のやうに體言の兒風を修飾して居る。右のやうに用言(及び活用連語)の連體形は體言の上に添うて體言を修飾する。

〔一五七〕我が國は神國なり。

君が代は久しかりけり。

少年の時重ねて來らず。

汝の答案を示せ。

一杯の水は一車薪の火を消すこと能はず。

右のやうに　が、の　の助詞を伴なつて居る連語は、形容詞にひとしく體言を修飾する。

〔一五八〕「我が國に於ける男女の數は男約四千萬、女三千八百餘萬。」

右の　於ける　はもとは動詞であつたが、今は全く助詞として用ひられ、「我が國に於ける」は「我が國の」といふのに同じい。それ故　於ける　に終る連語も形容詞的修飾語と見なされる。

文の中の體言を修飾するものを形容詞的修飾語といふ。

その二　副詞的修飾語

〔一五九〕少年の時重ねて來らず。

我が心始めて平かなり。

友人遂に知らず。

右の　重ねて、始めて、遂に　は副詞で、來らず、平かなり、知らず　の用言を限定して居る。それ故修飾語である。

〔一六〇〕六時に出發し、八時に到着す。

一艦は香港へ向ひ、一艦は仁川へ向ふ。

答案は毛筆にて認むべし。

廣軌鐵道は青森より下關まで敷設せらるべし。

六歳にして小學に入り二十二歳にして大學を卒業す。

右のやうに、へ、にて、より、まで、にして、その外、と、として　等の助詞を伴なふ連語は、その性質副詞にひとしく、それ〴〵の用言(又は活用連語)を修飾する。

【注意】一　よりの、への、までの　のやうに最後に　の　のあるものは、また形容詞的修飾語である。

例、東京までの旅行。

學者としての松平樂翁、(一五七)參照)

二　補語も　を　に、と、より　等の助詞を伴なつて居る。これを副詞的修飾語と區別する方法如何。副詞的修飾語と見るべきは、大凡次の類である。

(イ)　動作の起る場所、方角、時間又はその度數に關するもの。

例、東京に着く。
南方へ去る。
六月に開く。
二回に拂ふ。

(ロ)　動作をなす道具、材料に關するもの。

例、筆にて書く。
机は木にて作る。

(ハ)　動作の方法に關するもの。

例、趣味自然に生ず。
突然として來る。
何心なしに行く。

文の中の用言や副詞を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

(一六)　六歲小學に入り、二十二歲大學を卒業す。
この時大勢なほ定まらず。
風雨の夜、兄弟牀をならべて千古の懷を叙す。
翌朝戰場が原を横ぎりて湯本へ向ふ。
次の日東照宮に詣づ。

三月十七日夜釜山港より乘船し、十八日夕大阪に着く。

惡疫流行の際殊に衛生に注意すべし。

天地開闢以來君臣の分自ら定まれり。

副詞的修飾語の下には、これ等の例のやうに全く助詞を用ひないことも多い。

〔一六二〕今日の事情に於ては甚だ困難なり。

何の理由を以てこれを拒絶するか。

右の　於て、以て　も、もとは動詞であつたが、今は全く助詞のやうに用ひられて、副詞的修飾語につくのである。

〔一六三〕朝の六時に出發し、夜の八時に到着す。

答案は細き毛筆にて認むべし。

靜に眠れる兒は神の如し。

右の文で黑點を附けたものは修飾語を更に修飾した修飾語である。修飾語の中でも、體言なのは形容詞的修飾語に修飾せられ、用言又は副詞は、副詞的修飾語に修飾せられ、修飾語に修飾語を加へて、文は次第に複雜になるのである。

〔一六四〕次の例によつて、簡單な文が種々の修飾語を加へてだんだんに複雜になつてゆく有樣を知ることが出來る。

1　猫鼠を捕ふ。

2　小さき猫大なる鼠を捕ふ。

3　小さき黑毛の猫大なる白き鼠を捕ふ。

4　禪寺の小さき黑毛の猫緣の下の大なる白き鼠を捕ふ。

5　禪寺の甚だ小さき黑毛の猫緣の下の極めて大なる白き鼠を巧に捕ふ。

6　隣の禪寺の甚だ小さき黑毛の猫緣の下の極めて大なる白き鼠を最も巧に捕ふ。

7　この頃時々隣の禪寺の甚だ小さき黑毛の猫わが家の緣の下の極めて大なる白き鼠を最も巧に捕ふ。

〔一六五〕修飾語の上に修飾語を加へれば、いくらでも限りがない。けれども實際の文にはこんなに澤山の修飾語を添へることは稀である。

修飾語は常に修飾せられる語の上に附く。

練習三十、次の文から形容詞的修飾語、副詞的修飾語を見出せ。

1　家の側面にある白樫の下には、蟻が黑く、長く、一列になつて進軍して居る。彼等の或者は、大きな家寶である食糧を擔いで居る。(口)

2　敵のためには向風、味方は後より吹く風なり。餘りに強き風雨にて、沓掛の上の山に生ひたる二かい三がいの松の木、楠の木なども吹倒すばかりなり。

第二十九章　單文

〔一六六〕猫鼠を捕ふ。

隣の寺の甚だ小さき黑毛の猫緣の下の甚だ大なる白き鼠を最も巧に捕ふ。

右の二文は長さに於ては非常に相違があるが、主語が猫、述語が捕ふで、「何がどうする」といふ關係、即ち主語と述語との關係はたゞ一回成立つて居るのである。後者は修飾語を加へて、文の形が複雜になつたのに過ぎない。

〔一六七〕猫、鼠、狐、馬、牛、象、獅子、虎は哺乳動物なり。

右の文の主語は　猫、鼠、狐、馬、牛、象、獅子、虎　の八つである。これを書分けて別々の述語をもたせると。

猫は哺乳動物なり。
鼠は哺乳動物なり。
狐は哺乳動物なり。
馬は哺乳動物なり。
牛は哺乳動物なり。
象は哺乳動物なり。
獅子は哺乳動物なり。
虎は哺乳動物なり。

の八文となる。けれどもこゝでは引きまとめて、八つの主語に一つの共同述語をもたせたのである。この關係は「何と何と何とが何である」である。

〔一六八〕農夫は耕作し、收穫し、租稅を納む。

右の文の主語は一つであるが、述語は　耕作す、　收穫す、　納む　と三つある。これを別々に書きわければ、

農夫は耕作す。
農夫は收穫す。
農夫は租稅を納む。

の三文となる。けれどもこゝでは引きまとめて、共同の主語をもたせたのである。この關係は「何がどうして、どうして、どうする」である。

〔一六九〕余は學校にて修身、國語、漢文、英語、理科、數學、博物、圖畫、體操

を學ぶ。

父は財産を太郎、次郎、三郎、四郎、五郎に讓る。

右は多くの補語を有する例で、この關係は「何が何を何と何とにどうする」である。

〔一七〇〕太郎は詩文を甲先生に學び、圖畫を乙先生に受け、音樂を丙先生に習ふ。

右は補語、述語ともに二つ以上ある文の例である。

〔一七一〕兄と弟とはともに勞動し、ともに勉强す。

右は共同主語が共同述語を有する文の例である。

〔一七二〕以上〔一六七〕より〔一七一〕に至るまでの例を見よ。主語、述語、補語等の數の多少に係らず、主語と述語との關係は文法の形式上、即ち文を構成する形式に於ては唯一回成立つて居るのである。例へば〔一七〇〕の例でいへば、「太郎が詩文を甲先生に學んで、繪畫を乙先生に學んで、音樂を丙先生に學んだ。」といふことにて、「何がどうする」といふ文法上の構造は、唯一回成立つて居るのみである。

主語と述語との關係が文法上の形式に於て唯一回成立つたものを單文といふ。

〔一七三〕多くの共同述語をもつ場合には、最後の述語のみを適當な終止形で結んで、その他はすべて連用形に置くのである。

〔一六八〕〔一七〇〕〔一七一〕の例で見る通りである。

〔一七四〕(イ)數學を復習し、次に讀本を復習したり。

(ロ)第一大隊をして甲地に向ひ、第二大隊をして乙地に向はしむ。

(ハ)十六時間の戰鬪中一滴の水を飲まず、一粒の糧食も食はざりき。

(ニ)第一大隊をして甲地に向はしめ、第二大隊をして乙地に向はしむ。

(ホ)その德行仰ぐべく、貴むべし。

(イ)(ロ)は助動詞を繰返さないもの、(ハ)(ニ)(ホ)は助動詞を繰返した例である。

練習三十一、次の單文の主語、述語、補語を見出せ。

1 我等は手を以て人を代表させて、相手、手代技手、選手、交換手、運轉手などといふ。(ロ)

2 蟲聲水の如く流る。

3 風はげしく吹出でて、よろぼひたる家を打倒し、木の枝をさへ折りさきなどす。

4 父母や我を生み、我を養ひ、我を長ぜしめ、我を敎ふ。

5 誠實と勤儉とは商人の二大德行なり。

6 木曾山には檜、さはら、ねず、あすひ、かうやまきの良材多し。

7 水戸中納言光圀卿は賴房卿の第三子、東照宮の御孫なり。

8 余は毎朝六時に起き、七時に朝食を終へ、八時より午後三時まで學校に學び、四時より六時まで運動し、七時に晩餐を喫し、八時まで街上に散步し、九時より十時まで復習し、十時半眠に就く。

第三十章　句—複文

〔一七五〕(イ)秋風吹く。

(ロ)猫鼠を捕ふ。

(ハ)余は六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る。

右は單文であるが、

（イ）「秋風吹け」ば。
「秋風吹け」ども。

〔一七六〕

「秋風吹く」に。

（ロ）「猫鼠を捕ふれ」ば。
「猫鼠を捕ふれ」ども。

「猫鼠を捕ふる」に。

（ハ）「余は六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸れ」が。
「余は六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸れ」ども。
「余は六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸る」に。

のやうに、文の述語を　ば、　ども、　に、　その他　とも、　が、　を、　のみ、　すら、　は、　もの、　や　等一切の助詞に連らしめて、他の文の一部分とすることが出來る。

文の獨立を失つて、他の文の一部分となつたものを句といふ。

〔一七七〕句の用法に色々ある。

「猫の鼠を捕ふる」は甚だ巧なり。

詩人は「秋風の吹く」を悲しむ。

君は「余の六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る」を知れり。

右は文の主語や補語として用ひた例である。

句は文の要素たる主語や補語として使はれることが多い。

〔一七八〕魚の味は「秋風の吹く」時をよろしとす。

「猫の鼠を捕ふる」方法を見よ。

君は「余の六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る」習

慣を知るか。

右は句を文中の體言の修飾語、即ち形容詞的修飾語として用ひた例である。（第二十八章參照）

句はこのやうに文中の體言を修飾する形容詞的修飾語として使はれることも多い。

（一七九）「秋風吹け」ども、木の葉落ちず。

「猫鼠を捕ふる」に、犬夜を守らず。

「余は六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸れ」ども、君は終日家に在り。

右の如く用ひれば、上の文は副詞的修飾語となつて、下の文の述語を修飾することとなる。（第二十八章參照）

句はかくの如く、文中の用言を修飾する副詞的修飾語として用ひることも多い。

（一八〇）（イ）秋風の吹く時の初には。

猫の鼠を捕ふる方法の巧拙を。

余の六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る習慣の可否は。

（ロ）秋風の吹くに際し。

猫の鼠を捕ふるにあたり。

余の六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る習慣あるより。

右の附線した部分は全體として、（イ）は形容詞的修飾語であり、（ロ）は副詞的修飾語である。それ故、句は更に大きな修飾語の一部分として、その中に含まれることもある。（一六四）參照）

〔一八一〕以上述べたやうに、句は文の要素としても用ひ、要素の修飾語としても用ひ、修飾語中の語の修飾語としても用ひるから、句を含んだ文の形式は、かなり複雜なものになることが出來る。

〔一八二〕詩人は「秋風の吹く」を悲しむ。

右のやうな句を含んだ文について、主語と述語との關係を見よ。詩人の主語と、悲しむの述語との間に「詩人が悲しむ」といふ主語、述語の文法上の關係は已に一回成立つて居る。その上、句の中にも「秋風が吹く」といふ關係が一回成立つて居るから、この場合には「何がどうする」の關係は二回まで成立つて居る。これは最早單文ではない。

月滿つれば缺く。

右の例で「月滿つれば」の句はあるが、「缺く」の主語もやはり「月」で、「月がどうする」といふ關係であるから、やはり單文である。

一つ以上の句を含んで、主語と述語との文法上の關係が二回以上成立つて居るものを複文といふ。

〔一八三〕正成答へて、「陛下願はくは御心を安んじ給へ。」と奏す。

右のやうに文の中に獨立した單文を含んで居るものも複文である。

練習三十二　次の文から句を見出せ。

1　朝起きて外に出づれば白露地に滿つ。

2　雲の上の事は筆に載するも畏ければ洩しつ。

3　鴨の脚短しといへども、これをつがば憂ひなん。

4　波の起る原因は風と地震との二つなり。

5　箱根路を我が越えくれば伊豆の海やおきの小島に波のよる見ゆ。

6　田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける。

練習三十三、次の例について單文と複文とを區別せよ。

1　かくて西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。

2　風吹きすさみて波を起す。

3　風吹きすさめども波立たず。

4　謙信兵を帥ゐて川中島に陣す。

5　金剛石も磨かずば玉の光は添はざらん。

6　千丈の堤も螻蟻の穴より崩る。

7　尺蠖の伸びんとするや、まずその身を屈す。

8　菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、淋しいのは一人二人多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道をたどつて行く。（口）

第三十一章　節—重文

〔一八四〕秋風吹く。　木の葉落つ。

猫鼠を捕ふ。　犬夜を守る。

右は四つの單文であるが、

秋風吹けども、木の葉落ちず。

猫鼠を捕ふれども、犬夜を守らず。

のやうにいふと、二つの複文となる。又これを

秋風吹き、木の葉落つ。

猫は鼠を捕へ、犬は夜を守る。

のやうにいふと、上の文が獨立を失つて、更に大きな文の一部分となることは、句の場合に似て居るが、この場合には、上の文は下の文の附屬とならず、下の文と相對して同等に並び立つのである。

文中にあつて同等に並立する句を文の節といひ、二つ以上の節を含む文を重文といふ。

〔一八五〕天は高く、地は低し。

月明らかに、星稀なり。

柳は緑に、花は紅なり。

大河滔々として、連山巍峨たり。

これ等は形容詞を述語とした二つの文節を含んだ重文である。この例によつて、形容詞の述語として上の文節に來るときは、普通の形容詞では連用形たる　く　の形、形容動詞では　あり　に連らぬ本の形をあらはすことが分る。

〔一八六〕余彼を愛し、彼亦余を愛せり。

去年は中學校の選手優勝旗を得、今年は師範學校の選手優勝旗を得たり。

右等の例で文節を重ねる場合には、時の助動詞が最後の文節に置かれることが分る。

〔一八七〕彼もこれを知らず、余も亦これを知らざりき。

帆は風に取られ、楫は波に碎かる。

陸軍は第三軍をして旅順に向はしめ、海軍は第二艦隊をして浦鹽斯德に向はしめたり。

太郎は算術を復習すべく、次郎は文法を復習すべし。

頭は猿の如く、尾は蛇の如し。

右等の例で打消、受身、使役、比較の助動詞は、各文節毎に繰返すのが普通であることを知る。

〔一八八〕春來れども花咲かず、秋立てども葉落ちず。

右の各文節は複文であるが、複文を節として重ねたものも重文である。

練習三十四　次の文の文節を示せ。

1　波濤驚き、雲霧裂け、その音百雷の一時に落つるが如し。

2　月霜の如く地にさえ、風海の如く空に吼ゆ。

3　性質溫厚にして、頭腦明晰なり。

4　少年老い易く、學成り難し。

5　兩岸の綠樹鬱蒼として目を樂しましめ、大江の碧流滔々として心を洗ふ。

6　霜降り、木枯吹きはじめてより、庭の紅葉、門の銀杏頻に飛びて、晝は書窓を拂ふ影鳥かと疑はれ、夜は軒をうちて晴夜に雨を想ふ。

〔一八九〕以上學んだ所によつて見れば、文は構造上から次の三種に分れることが知れる。

一、單文

二、複文

三、重文

〔一九〇〕吾等は單文だけで如何なる思想をも言ひあらはすことが出來る。けれども單文ばかりを使へば變化に乏しく、又かへつてくだくだしくなるおそれがある。それ故或は複文を用ひ、或は重文を用ひ、三種の文を入交らせて變化を多くするのである。

第三十二章　文の構造に就いての注意

〔一九一〕饑渴食を乞ふものあり。

人をして欽羨措く能はざらしむ。

右の例なる　饑渴、欽羨　は正しくは「饑渴して」、「欽羨して」といふべきもので、動詞として用ひたのである。但し今の文には、かういふやうにサ行變格の語尾を略した例が極めて多いから、誤とはいはれない。文の構造を見る上に注意すべきことである。

我が縣に於ては新に第五中學校を建設の目論見あり、

曩に歐米へ出張の某大學教授は去る十五日歸朝せり。

右の　建設　出張　等は上の語句に對しては動詞の地位に立つて居るけれども、下に　の　に連つたのを見ると、名詞の性質をもつて居る。これ等も「建設する」、「出張した る」等と書くのを至當とするが、今の文にはこれを用ひることが多いから、今の文法として認めてもよからう。但し次のやうなのは妥當でない。

兒童を教訓に裨益あり。

ニュートンは自暴心を戒め、忍耐勉强者にあらずや。

要するに、文の叙述説明をなす語(述語)の曖昧ならぬやうに

注意しなければならぬ。

〔一九二〕(イ)國語は各科目中最も重要なり。

(ロ)性質溫厚にして、頭腦明晰なり。

(イ)の文では「重要なり」が述語、(ロ)の文では「性質」に對する述語が「溫厚なり」、「頭腦」に對する述語が「明晰なり」である。これを更に他の文中に挿んで、

(イ)國語は各學科中最も重要の學科なるに拘らず……

(ロ)性質溫厚にして、頭腦明晰の人といへども……

の如く用ひる時は、今までの述語は全くその形を失つてしまふ。これはやはり

國語は各學科中最も重要なる學科なるにも拘らず……

性質溫厚にして、頭腦明晰なる人といへども……

と書くがよろしい。

練習三十五　次の文に誤があるなら正せ。

1　月明らかに星稀の夜。

2　學理に通達して性質溫厚の人なり。

3　飛行機は今日の軍事上最も重要のものなり。

4　勤勉にして質素の國民なり。

5　長生の法豈他あらんや、平常衞生に注意による。

6　この切符は一人一枚限り、他人に通用を許さず。

〔一九三〕寒威骨に刺す。

とはいへないが、

慚愧背に汗す。

とはいへる。次の例の誤であることに注意せよ。

幼時より惡事を慣れて、

會議を參與す。

六藝を熟達す。

〔一九三〕次のはどちらも正しい。

これに屈す。

これを屈す。

事務を囑託す。

某氏に囑託す。

要するに、適當な補語を置かなければならぬといふことである。

練習三十六、次の動詞には「何に」の補語を適當とするか、「何を」の補語を適當とするか。

鑑る　比す　準ず　命ず

越ゆ　注意す

練習三十七、次の文に誤謬があるなら正せ。

1 すこぶるその業務を熱心す。

2 全國を通じて一人の徵兵忌避者なし。

3 身六藝を通ずるもの三千人。

4 能く四方の事を留意す。

5 寒氣人の肌骨を刺す。

6 皆堅緻なる石灰石にして、高さ三尺を越ゆるものあり。

〔一九四〕聽け、一場の夢物語を。

問はずして知る、その佛國軍隊なるを。

これ等は文の語句を顚倒したものである。かく述語を上

に補語を下に置く場合に、やゝもすると誤つてその補語を忘れることがある。

聽け、砲聲耳を驚かせり。

問はずして知る、そは佛國の軍隊なりき。

の如きは、上の述語を置去りにしたのである。

〔一九五〕言慣れた句にはそれ〴〵の結方がある。例へば、

宜なるかな、その芳名を千載の下に止めしこと。

況や人たるものに於てをや。

思はざりき、今日再び君に逢はんとは。

これ皆顚倒の部類に入るべきもので、上の言出しに對しては、必ず下の結がなければならぬ。

宜なるかな、その芳名を千載に止めたり。

況や人たるものはこれを勉めざるべからず。

思はざりき、今日再び君に逢ひたり。

などは、この呼應を誤つたものである。

【注意】「於てをや」の　をや　を　おや　と書く人がある。感動詞の　を　だから、お　ではいけない。

〔一九六〕憾むらくはこれを見る日の遲かりしを。

恐らくは知る人なき(こと)を。

願ばくは諒察せられんことを。

庶幾くは咸その德を一にせんことを。

これ等の　憾むらくは、　恐らくは　等は、　憾むことは、　恐るゝことは　といふ程の意で、下の補語の呼應を必要とする。これを誤つて、

憾むらくは遂に相見るの日無かりき。

恐らくは知る人なし。

願はくはこれを諒察せられたし。

庶幾くは咸その德を一にすべし。

のやうにいつてはならぬ。但し

恐らくは知る人あらじ。

願はくは花の下にてわれ死なん。

のやうに、下に推量の語句を以て結ぶ時には差支がない。

〔一九七〕天下いづれの日にか定まらん。

如何でかこれを能くすべき。

いづくんぞこれを斷行するを得ん。

豈驚かざるを得んや。

右等の如く　いづれ、如何、いづくんぞ、豈　等の如き反語の言方で、強く裏から言ふ場合には、下には推量もしくは疑問を示す語句を置かなければならぬ。

天下いづれの日にか平かず。

如何でかこれを能くせず。

いづくんぞこれを斷行するを得ざるなり。

豈笑ふべきの至なり。

などの如きは、もとより語句をなさぬのである。

練習三十八、次の文はどう書いたらよいか。

1　況や大業を成就することを得んや。

2　如何ぞ大業を成就するに於てをや。

3　思はざりき、恩誼の人を感せしむること、かくの如く深きか。

4　宜なるかな、芳名を千載に傳へ得たり。

5　唯恐らくはよくその任に堪ふべきや否や。

6　問はずして知る、これ懶惰の結果に外ならざるなり。

7　嗚呼何ぞこれを顧るの暇あらずや。

8　何を求めて得ざることなく、何を欲して成らざることなし。

〔一九八〕こゝに甲乙の二人互にその主張を棄てざるものありとせよ……

若し一人の不賛成者あらんか……

若し深謀遠慮無からんには……

これ等は皆文の中に含まれた句で、條件をいひあらはすのである。

〔一九九〕歴史に通ぜざる時は、古今の成敗を知ること能はず。

燕の低く地に舞ふ時は、必ず雨降るべし。

右の如く　時は　を以て原因條件をあらはす語句を造ることもある。

〔二〇〇〕これ人たるの道を解せざるなり。

何となれば人物を評論するに、單にその學力のみを標準とすべからざればなり。

これは普通の順序で説明する句法であるが、上下の呼應を誤つてはならぬ。

練習三十九　次の文の語句を、善し悪しの二つに分類せよ。

よし　　あし

よからず　　あしからず

よからんや　　あしからんや

よからずや　あしからずや
よからざらんや　あしからざらんや

〔二〇一〕文の上部に　なん、ぞ　の助詞がある時は、述語の形容詞、動詞、助動詞　は皆連體形を用ひる。

これなん陸奥の境なりける。

人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香に匂ひける。

〔二〇二〕文の上に　こそ　の助詞があれば、下の述語は　ども　に連る形即ち已然形で結ぶ。

好きこそ物の上手なれ。

八重葎茂れる宿の寂しさに人こそ見えね秋は來にけり。

〔二〇三〕「珍しき春も明日とぞ聞ゆれ」ば暮れなん年を何か惜しまん。

「淺くこそ人は見る」とも關川の絶ゆる心はあらじとぞおもふ。

「下にこそ人の心もうつらふ」を色にみせたる山櫻かな。

右の如く附屬句の中にあらはれた係は、下の結に影響することがない。

〔二〇四〕この人數船なればこそ涼みかな。

白雪の八重降りしけるかへる山かへる〳〵ぞ老いにけるかな。

感動詞で結ぶ時には、係の影響を受けない。

練習四十、次の文中に係結の誤があるなら正せ。

1　この偉人を生める母の人格こそその子にもまさりて傳ふべきなり。

2　かくまでに國家を思ふ人の心こそ有難き。

3　今か今かと待ちたりける。

4　有合ふ人々皆鎧の袖をぞぬらしけり。

5　嗚呼何ぞその慈悲の浩大にして無邊なり。

6　夏の風も親しむべし、さはいへどなほ草花の咲亂れたる庭園ぞ嬉しけれ。

7　こゝは二子山の麓にて、いと高き處なるにや、世の暑さも覺えず。

8　櫻の木を押削りて、大文字に一句の詩をなん書付けたりけれ。

9　見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりけり。

10　公(岩倉具視)の病に侵され給ひつるは、明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より、何となくあらざらん後の世の心盡しの節々を、知る人に語らひ給ひしこと多かりける。同年の冬或人の許へ贈り給へる書の末に、

さりともとかきやる浦の藻鹽草誰が下りたちてかづきあぐらん

とぞありき。先だつも後るゝも世の習とはいひながら、御國の爲に行末を思ひやられし公の心こそいとあはれなる。

改訂
帝國新文典
下卷終

大正十二年一月十三日再版印刷
大正十二年一月十六日訂正再版發行
大正十四年十月二十七日改訂印刷
大正十四年十月三十日改訂發行

改訂帝國新文典　上卷定價貳拾七錢　下卷定價拾九錢
昭和三年度臨時定價　上卷金四拾五錢　下卷金參拾貳錢

著作者　芳賀矢一

發行兼印刷者　東京市神田區通神保町九番地　合資會社　冨山房

代表者　同所合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬

印刷所　東京市小石川區音羽町六丁目二十九番地　冨山房印刷所

發行所　東京市神田區通神保町九番地　合資會社　冨山房
電話神田二四一・二四三・二四五・二三〇三
振替貯金口座東京五〇一番

滿島縣
三次郡

三木俊夫

廣島縣立三原高等學校

三木俊夫

三原高等學校寄宿舍內

三木俊夫

第七學級

三木俊

三木俊夫

三原高等學校

三木俊夫

三原高等學校寄宿舍

三木俊夫

広島大学図書
2000064974